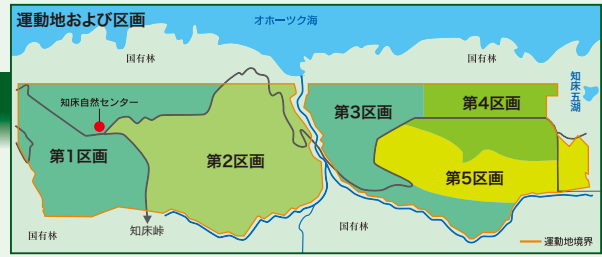




# 平成20年度(2008)の森づくり

平成20年度(2008)は、幌別台地の西側に位置する第1区画を中心に作業を行いました。5年毎の回帰作業も3巡目を迎えています。



## カラマツ林試験地 10年分の小さな森

運動地の中に小さな「森」ができています。キハダやオヒョウなど20種類以上の広葉樹の木々が自然に飛んできた種によって芽吹き、生長している場所があります。

今から10年前、開拓当時の1960年代に植えられたカラマツの林を防鹿柵で囲いました。これは一度人の手の入った森をどのように復元するかを調べるための試みでした。ここでは防鹿柵で囲うほかに、カラマツの木の本数を減らして陽光が入りやすくなる場所もつくり、それぞれの変化を追跡する調査を行っています。

10年後の現在、カラマツの密度を下げ、エゾシカの影響(食圧)を受けない防鹿柵で囲った区画は、人の背丈を超えるほどのたくさんの広葉樹で覆われてきています(下図C)。ここは、運動地のどの場所でも見られないような、小さな森になっています。一方、同じ柵の中でも光が入りにくい場所では、広葉樹で覆われているもののその背丈は高くありません(下図B)。



A 防鹿柵外・陽光少ない

B 防鹿柵内・陽光少ない



D 防鹿柵外・陽光多い

C 防鹿柵内・陽光多い

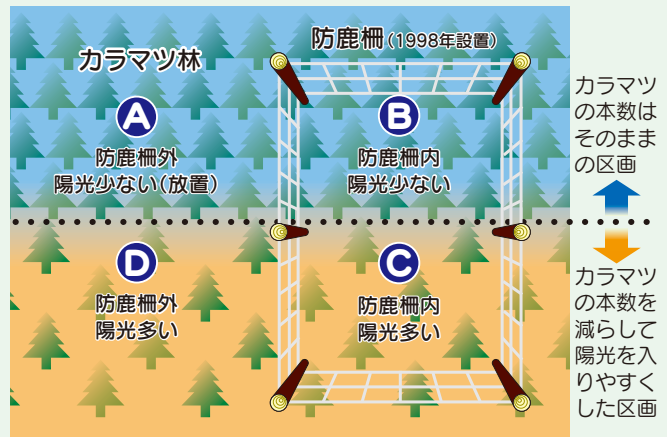
防鹿柵の外ではほとんど広葉樹の姿を見ることはありません。ただ、柵がなくても光が入りやすい場所では、シカに食べられない針葉樹のトドマツがすくすくと育ち始めています(下図D)。

この小さな「森」は、知床の中のほんの小さな点に過ぎません。しかし、この森はたくさんのことを教えてくれます。シカの圧力の強さ、陽光の重要性、そして知床の森には次の世代へと命の輪をつなげていく力がまだ残っていることを。

運動の森づくりは、ひとつひとつの作業結果を確かめながら、自然に対し常に謙虚な姿勢で進めています。「森」が教えてくれるたくさんの事実は、未来の知床の森へとつながっていきます。



防鹿柵の中と外。10年間の森づくりの成果をひと目で見る事ができる場所のひとつです。



カラマツ林試験地の模式図

## 「カラマツ」の役割

北海道のいたる所で見かけるカラマツは、もともと北海道にはなかった種類の樹木です。原生の森の復元を目指す運動の森づくりでは、もともとなかったこのカラマツを将来的には減少させていく方針です。ただし、現在の知床の森は、多くの広葉樹の木々がシカに食べられて少なくなり、そこに風が吹き抜けることによって森の衰退が始まるようとしています。その中で、シカに食べられにくいカラマツは、防風林として周辺の森を守る重要な役割を担っています。そのため、当面カラマツには、大きく手を付けずに、現状を維持していくことにしています。



冬のカラマツ林試験地

## 平成20年度(2008)の作業実績

平成20年度(2008)は樹皮保護ネットの巻き直しや防鹿柵の支柱交換などメンテナンスを中心に作業を進めました。その他、苗畑で育成している広葉樹の植樹作業、サクラマスの復元に向けた卵の放流などを行いました。

\*平成21年度(2009)は第2区画を中心に作業を行います。